
優しいぬくもり

洗井 あい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しいぬくもり

【Zコード】

Z2499A

【作者名】

洗井 あい

【あらすじ】

他人の彼女に手を出して、いつひどくシメられたオレ。そんな馬鹿なオレを助けてくれたのは、良くも悪くも田辺兄弟とその父親だった。

1 (前書き)

「ボクは夢を見る」番外編「喧嘩上等ツス

頭がガンガンする。

「病院にいかなきゃダメ?」「…こんな痛みぐらいで気弱になつて馬鹿みたいだ。

口の中はサビた鉄の味がしていて、舌を動かしたら傷口から血が流れ出た。

身体中がギシギシと痛んで、顔を上げるのもままならない…

「・・・クツ」

薄汚れたコンクリートの上にぶつ倒れている無様な自分の姿、なんでこんな目に?

「しかたないだろ、ヒトの女に手を出したんだから」そりやそうだ。
・・相手が悪かったと反省中。

地べたに顔を押し付けられたまま、引きずられて、まさにボロ雑巾つて感じ?

もしかしたら、少年Aにしちゃつかもな・・・コイツの」と。
急に可笑しくなって、笑いを必死で押し殺している自分に気が付いた。

「テメー、何笑つてんだ! 頭おかしーんか!…
「グフツ」

腹を思いつきり蹴られた衝撃に、口の中に溜まっていた血を噴出す。自分の吐き出した血液が、顔にヌルリとくっ付いて気持ち悪いな…

・
彼女を寝取ったくらいで、尋常じやないよ、まったく。

自分が非力なのはしかたないとしても、正々堂々と相手にならなく
たつて良かったのに・・・
オレって、ホントのお馬鹿さんってね。

「馬鹿な奴、マサジさんのお嬢様に手を出すなんてなあ」「ホント、どーなるかフツーはわかるよなあ」

オレ、フツーじゃないからわかんない。

オレと「マサシ」とかいゆー高校生を取り囲んでいる奴らの靴が、僅かに視界にはいるだけ。

きつと目とかスゲー腫れてるんだろ? な・・・重くて開かないもん。ほとんど感覚のない腕で、血溜まりから逃れようと逆向けに身体を転がした。

「うえ、サイアク」「マジヤバクね？」

そんなにスゲーんだ。
何がなんだかわからんねー、あー、喉渴いたなあ・・・
身体中が物凄い悲鳴をあげてオレを襲つているつてのに
まったく恐怖を感じないのは、オレが元から現実逃避してゐるからかも

「キレイな顔してからつて、調子のいいんじゃねーぞ、コラー。」「マサシさんー！」

蹴られるのを覚悟して身構えていたけれど、身体に激痛は走らない。なんで?

顔のすぐ横でバタバタしないでくれる?ううとうしつていうが
いつ踏みつけられるかつて、気がきじやないんだから。

「もう止めてよ、これ以上ヤッたらマジで死ぬって

「つむせー田辺、ヤラセろ！」

「もう十分だよ、コイツだってわかつてゐる

「・・・チツ！ テメー、今度ミホに近づいたら本氣でぶつ潰すぞ」

いや・・・もーかなり本氣でぶつ潰されてるこ、これ以上上つてア
ルんだ。

親切な誰かさんのお陰で命拾いしたつて？お節介なヤツもいるんだ
な・・・

意識が少しずつ途切れ始めているのがわかる、頭の上で、ゴチャヤ、ゴチ
ヤとした話し声。

次に気が付くと、奴らの気配は無くなつていた。

このまま死んだりして・・・出血多量？それか窒息死かも・・・
さつき仰向けになつたせいで上手く息が出来ない・・・苦しいな・・・
・コレ・・・

ゴホゴホッと咳き込んだ拍子に、激痛が全身を走り抜け、オレを心
地良い世界にいざなつていった。

水・・・水が飲みたい・・・口の中の血なまぐれこ匂いに吐き気を覚えながら目覚めると、

見知らぬ奴が傍らで呆けたように眠っていた。

悪ぶつて抜いたような茶髪の髪の毛と、あどけない寝顔が似合わなくて思わず笑ってしまった。

「イジがオレを助けたのかな・・・テキトウに貼られた絆創膏の下から、

未だに出血していく血液が滲んでいる・・・ヤルなじゅやんとヤレっての、テキトウ過ぎ。

流れた血が乾いて頬が強張っていた。

軋む身体をゆづくつと起こすと、激しい痛みがわき腹と頭に襲い掛かってくる。

「つう・・・アバラ・・・いつてるかもな・・・腕も脚も折れてはいないうだけど、それでもひどく痛んだ。

革張りのソファーには、オレから流れた血が乾いて固まっている。

身体中が熱をもってジクジクと疼いていたけれど、いつまでも口に居る訳にはいかないな。

助けてくれたのは有難いけど、あのまま放つて置いてくれたら良かつたに・・・

お節介な馬鹿の、暢気な寝顔に反吐が出る。

「ぐう・・・」激痛で気が狂いそうになりながら、テーブルに手をついて立ち上がろうとしたけれど

平衡感覚を失つて床の上に四つん這いに手をついた・・・チキショ

ウ、動けっての・・・

ポタリと垂れた血の滴に、少し気が遠のいた気がした。
早く、行こう・・・

這いつくばるような無様な格好で玄関までたどり着き、おぼつかない脚を靴に滑らせたその時、
ガチャリと音を立ててドアの鍵が回った・・・ヤベえ、誰か帰ってきた・・・
ありつたけの力を振り絞つて立ち上がったけれど、グルグルと視界
が回り始めた。

コラコラと揺れているのが自分なのか、周りの景色なのかわからな
いまま
オレの視界に入ってきた男の驚愕した顔・・・笑えるかも、コレ・・・
・

「おーー!」

グラリ・・・歪む、世界が歪んでいく・・・
パタンと音を立て、オレの全てが闇に閉ざされた。

喉が・・・水、水、水・・・

カラカラに乾いて張り付いた唇に、やさしい甘い水滴が落ちてくる。
もつと・・・もつと水・・・頂戴・・・、陸に打ち上げられた魚の
よじに喘いだ口の中に滴り落ちる甘い水。

「んああ・・・」声にならない声で、渴きを癒すその水を貪る・・・

「・・・もつと」、困ったように微笑んだ男は、傍らのペットボトルの水を口の口に含むと
躊躇することなく、オレの濡れた口に流し込んでくれた・・・生き

てる、オレ・・・

柔らかな男の唇の感触につつとつとしながら、口移しに流れこむ水の甘さに酔つた。

「もう、いいかな？あとで水差しを持つてこさせるとひ

僅かばかりに頷いて、肺の中の腐つた息を吐き出した。
大きく息を吸つた途端、激しい痛みがわき腹を襲つた。

「くつうう・・・」

「アバラが3本ばかり折れているからね、しばりくじつとしていな
さい」

腕に繋がれた点滴と、身体に巻かれた包帯の匂い・・・白い天井・・

ベッドの上に寝ているオレは、病院へ担ぎ込まれたらしいけど。

「コイツ、誰？医者か？

「キミは、リョウの友だちかな？」

「だれ？」

「私の弟の田辺リョウの友だち？」

「しりません」

不可解そうな顔をして、その男は腕を組んだ。

ベッドの脇のイスに腰を下ろして、首から聴診器を提げてはいたけれど、

白衣なんて着ていなかつた・・・それより、医者には見えないくら
い・・・素敵。

「んー、キミはウチの玄関先で倒れたんだけど、覚えてない？」

「お・・・」

こいつ、あのお節介ヤローの冗談なんだ……オレの最後の記憶……

その人はどんな事を思いながら、オレに話しかけているのかな？医師独特のひょうひょうとした口調に不安になる。

「私が帰宅してドアを開けたら血だらけのキミがいたんだからね、驚いたよ。

そのまま意識を失つて倒れてしまつたから、慌てて病院に引き返してきたんだけどね」

「・・・」

「リョウの友だちじゃないのかい？」

「違います。シメられたのを助けてくれたみたいで・・・覚えてないんですけど」

「誰にやられたの？」

「・・・」

「女の子がこんな事をされるなんて、医師としては警察に通報する義務があるんだ」

「・・・」

「誰にやられたの？」

「『家族に』迷惑が掛かりますから」

「リョウにもやられた？」

「彼には何も」

医師は大きなため息をついて、考え込むように手をつぶつた。

その端整な顔立ちと優雅な気品に、瞼の腫れで視野の狭いオレの目が吸い寄せられていた。

キレイなヒト・・・地位も名誉も、女も自由に手に入れられる男に

惹かれている自分がいた。

「とにかく、最低でも顔の腫れがひくまでは、入院してじてもいいわよ。

明日は、朝から脳の検査と内臓の検査をします、食事は摂らないうに

うに

「あの」

部屋を立ち去るひつと立ち上がった男は、医師の顔でオレを見下ろした。

「なに？」

「弟さんは関わりたくないんで、このこと黙つてもうりますか？」

「わかりました」

「それと・・・ありがと」冗談こます・・・色々と」

肩眉を吊り上げて見せると、口元だけで微笑んでみせ
ビニール袋に入れられた、血生臭い衣服を手にとつて言った。

「コレ、洗濯に出しておくからね。」

「あ・・・すみません」

「もう、寝なさい。痛み止めが切れたら、もつと痛くなるよ」

彼は、外されていた氷嚢を頭の上に乗せ直した。

その時、氷嚢から滴り落ちた水滴が日尻にポトリと流れ落ち
言う事をきくいつとしない身体に、その冷ややかな感覚が伝わって身
震いした。

「もう一度、水、飲んでおく?」

オレは、彼の言葉に黙つて頷いた。

再び重ねられた唇から流れ落ちる水は、砂漠に落ちる水のようにあつという間に消えてなくなる。

意地汚く彼の口の中に滑り込んでいつた自分の舌先が、執拗に彼の舌を絡めとつている・・・

オレ、なに欲情してんだろ?・・・こんな時に・・・唇の痛みも忘れ、甘い蜜を舐めた。

彼の驚いたような顔と共に吐き出された、甘い吐息に満足して、オレはそつと舌を抜く。

こんな現実味のない出来事が実際に起ころんてな、トンでるのか?すごい顔しててるのに、口の中は血生臭いはずなのにね・・・笑える、地獄の後に天使発見かよ、ツイてるかも、オレ。

「まだ若いのに、キスが上手いね。忘れられなくなりそうだよ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

彼はすぐさま医師の顔を取り戻し、ぐるりと背を向けて部屋を出て行つた。

満たされた気持ちで頬が緩む・・・アタタ、顔じゅう痛えー・・・病院の寝巻きのカツチリとした肌触りがザワザワと肌を撫でて不快だつたけれど、ぶつ飛ばされてこんなに身体はボロボロだつたけれど、なんだか妙にハッピーな気分なのが不思議。

ナチュラルハイ?それともこの点滴のせいかな、ぶん殴られて脳みそバーンって感じかも?

白衣?の天使の心地よいキスを思い出しながら、オレは重い瞼を閉

じ
た。

ズキン、ズキンと、容赦なく身体に杭を打ち込まれるような痛みで目が覚める。

くそつ、痛み止めが切れた、くう、コレって痛すぎ……激しうぎる痛みに仰け反ってしまう。

手が握つたベッドの柵が、ガチャガチャと大きな音を立てる。真つ暗な病室の異様な気配に気が付いてか、若い看護士が慌てて走ってきた。

「どうしました？」

「つう・・・」

「聞くなよ、訴えようにも、こんなんじや・・・ムリ・・・」「くつうう」・・・額に冷たい汗が流れる。

柵を固く握つた手は、徐々に血の気が失せていく・・・痛てえー

「一応、先生、呼びますね・・・待つててね」

待つててねつて、何処にも行けないつてのー、身体の不自由さと痛みとで朦朧となりながら意識失つた方が、絶対、ラクになれるよなーなんて・・・イテテ、イツテー・・・バタバタと看護士の廊下を走る足音が遠のいて行く、ナースステーションでは他の病室からもお呼びが掛かってるみたいだ。

枕に顔を埋め、息を殺して痛みを我慢していた。

突然、力チャカチャつと医療器具の音がしたかと思うと、腕にアル

「ホール綿が触れた。

「動かないで」

中年の男の声がした。

「MRIは、したのか？」

「明日の朝の予定で……」

「まつたく、ジュンのやることは……今から連れて行きなさい」

痛みに冷や汗を流しながら、僅かばかりに見えた医者の顔を睨み付けた……

「ん？ そんな元氣があるなら、このくらい我慢しなさい」

我慢しろって……ヤブ医者かよ、こいつ……あの人によく似た医師は言ひ。

ベッドサイドの明かりに照らされた顔は、無表情で厳しい雰囲気、近寄りがたい印象だった。

「田辺先生がいらしてくれて、助かりました」

「ジュンはどうしたんだ、当直じゃないのか？」

「はあ……そなんですが……ちょっと外出しております」

検査の間中、その医師は片時も傍を離れなかつた。

救急救命へ運ばれてきた患者とすれ違うように検査室を移動して、その間中ずっと。

よっぽどヒマな先生なんだな……

薬が効いてきて、スーっと痛みが引いていったと同時に、強烈な眠気も襲つてきていた。

身体がフワリと浮いて、ベッドに寝かされた時には、目なんて開けてられなくて

枕元の話し声が、子守唄のように耳に流れていた。

「まだ、子供じゃないか・・・なんなんだ、コレは」
「ジュン先生がお連れになつて、大袈裟に騒ぐなとおっしゃいまして」

「すぐにジュンを呼びなさい」

慌てたようにガタガタと開かれた扉、看護士のパタパタと走る足音。そして、呆れたようなため息が聞こえる。
ややおいで、腫れた瞼に冷たいタオルが押し付けられた。

「身体は、大事に扱いなさい」

父親と変わりない年齢に見えるその男の言葉に、何故だか素直にオレは頷いていた。

「少し頭の中が腫れてるんだけど・・・数日安静にしていれば手術しなくとも大丈夫だからね
明日、話をしよう。薬は朝まで効いてるはずだから、安心して眠りなさい・・・」

彼の低い穏やかな声に安堵しながら、オレの身体も心も久しぶりに深い眠りに落ちていった。

翌日の早朝、10歳も年の違う従兄弟が不機嫌な顔で病室の扉を開けた。

誰だか見分けがつかないくらい腫れあがったオレの顔を見るなり、皆から冷たいと言われる瞳に涙を浮かべ、掛けた言葉を失っていた。

「おはよー、ゴメンねタカ兄呼び出しちゃつて」

「なんだよ、その顔・・・」

怯えた様な足取りで、オレに距離を置いてベッドの脇に立ち尽くす。そりやそうだよね、こんだもん・・・オレだって、スゲーショックなんですからね
元に戻るのかつて心配かも・・・

「脳みそが腫れてるから、安静にしてなきゃダメなんだって。

おじいさんとおばあさんにバレちゃった?」

「いや・・・大丈夫、言つてない。友達と卒業旅行に行つたつて言つておいたよ。

ホラ、マンションから着替え持つて来たぞ」

「ありがと」

オレの元気そうな声に安心したのか、タカ兄はドスッとパイプイスに腰を下ろすと

横になつて点滴を受けているオレの顔をマジマジと覗き込んで、露骨に嫌な顔をする。

あんたも、医者だろがーーと、突つ込みたくなつたけど、歯科医だもんな、慣れてないか。

「誰にやられた？」

「んー、マサシとかいうヤツ。女に手出ししたからなんだけねー」「またかよ、いい加減にしろよ。子供のクセにヤルことだけは一人前なんだから」

後見人の祖父母に連絡するには忍びなくて、母の兄の息子、従兄弟のタカ兄に連絡してもらつた。

タカ兄は、先週からオレが一人で住み始めたマンションに行つて、電話で看護士に指示された身の回りのモノを見繕つて持つてきてくれたのだけど・・・

オレの変わり果てた姿に、ショックを受けている事は確か。だよなー、タカ兄のお気に入りのお人形さんがこんな姿にされちゃーなー。

「ゴメンね、タカ兄、忙しいのに・・・」

「・・・痛いか？」

「少し」

タカ兄は、震えた手で・・・そつと腫れ上がった唇を撫でた。ジクジクと疼く顔、大きく息をする度に、横腹をさす痛み、頭はズンと重くて鈍い痛みが止まることなく続いていたけれど、我慢できないほどじゃない。

「可愛い顔が台無しだな」

「アハハ、タカ兄のお気に入りなのにね」

「もつと自分を大事にしろ、でないと心配で仕方ない」

「・・・」

わかつてるよ、わかつてる・・・でも、オレ・・・生きてるって実感が無いんだ。

こうやつて追い込まれたつて、痛くて痛くて気が狂いそうになたつて、生きてる気がしない。

オレの時間は数年前から止まつてしまつて・・・田の前で一人が逝つてしまつたから。

そして、オレ自身の中に発見した、他人とは違う自分の感覚をどうしていいかわからない。

「ミナミ、大丈夫か？」

「うん、ゴメンね、ゴメン・・・タカ兄」

「いいから・・・帰りにまた寄るから、買ってきて欲しいものあるか？」

「んー、今のトコはないかな。あんまり食べられないし」

「そつか、じゃあ行くよ」

タカ兄が立ち上がつたと同時に、病室のドアがノックされ、白衣を身にまとつたアノ人が姿を現した。タカ兄と医師が互いの顔を見つめあうなり・・・ニヤリと笑つて歩み寄る。

「何してる、タカユキ？」

「アレ、ジョンさんが担当ですか？」

「いや、担当は親父なんだけどね」

「外科部長自ら担当してくれるんですか？それなら安心してお願ひできる、後で挨拶しに行きますね」

「彼女、オマエの何？女？」

「従姉妹なんです。今はあんただけど、とてもキレイな子なんですよ」

「ああ、そうだろうな・・・」

アララ、どうやらこの一人、繫がつていたんだ。

昨夜の甘いキスの余韻が舌の上に甦って、身体の奥で僅かな欲望が疼いた。

「ミナミ、サークルの先輩で田辺ジュン先生、優秀な外科医だよ」「タベはい迷惑お掛けしました」

「少しばかり元気になつたようで良かった、私はキミの担当じゃないけど……」

外科部長が付いたから安心して。後輩の従姉妹とあれば話は別だし、最後まで面倒みさせてもらいます」

「ジュンさん、どうしてオジサンが担当に?」

「ああ、親父の氣まぐれみたいだよ」

意味深げにオレに笑みを投げかけた、彼の真意はわからなかつた。昨夜はあんなに素敵に見えた男の姿が、明るい日の光りの下では色あせて見えるのは何でかな。

カツチリと固められた髪と、真面目さを装つかのように掛けられたメガネの違和感。

白衣といつ鎧を身に付けて、彼は……自身を守つてゐるのかもしれない。

「じゃあ、ジュンさん、宜しくお願ひします」

「了解」

夕力兄は、先輩医師に会つて安心したようだ。

明らかに来た時とは変わって朗らかに笑うと、手を振つて病室のドアを閉める。

個室に残された医師とオレの間に、少しばかりバツが悪い空気が流れていった。

先に口を開いたのは、ジュン先生。

「そつなんだ、タカユキの従姉妹だったんだ」

「はあ」

「少し診察しようつね」

彼はオレの手首を取つて、脈診を始める。

近くに寄つた彼の白衣から、女物の香水の匂いが微かに漂つた。
なるほどね・・・そういう類か・・・と、この大人の男に引かれた
理由にも合点してしまう。

見上げた彼の端整な顔のつくりにつつとりとしながら、この先に必ず重ねるであろう身体の温もりとその重みを想像する。

カツチリと固められた髪が、アンバランス過ぎて吹き出しちゃうになつていてのを、

甘く涼やかな目元が咎めるように睨み付けた。

「なんですか？」

「ワザといっしょで、面白い

「コレ？」

と、髪の毛を指差す。

「メガネまで・・・そこまでする必要あるの？」

「モテすぎちゃうからね」

メガネを外し胸のポケットにしまつと、ニッコリと微笑んで聴診器を掛けた。

必要以上に大きく胸元を開いて・・・オレの胸を值踏みするかのようにじこりと舐めるように見つめている。

「なにか・・・傷になつてます?」

「・・・どう、コレ、痛い?」

右手で聴診器を胸に当て、左の3本の指の腹で、円を描くかのよつに乳房を撫でる。

ゾクゾクつ首筋を走つた感覚に小さく呻いてしまつたから、彼は調子付いたに違ひない。

その指先が、立ち上がつた乳首にも触れ始める。

「ん、・・・先生」

「早く治してしまいなさい、そうしたらもうと気持ち良くなげられるんだからね」

興奮したせいか、頭がズキンと痛み始めていた。

安静にしてなきやいけないのに、こんななんじやいつか死んじやうかも?

「頭、痛い・・・」

「ゴメンよ、興奮させちゃつたからね。」

寝巻きの胸元を丁寧に閉じると、彼は無垢な首筋に口づけした。

「タカユキがよく話していたのを思い出したよ、お人形さんみたいに可愛い従姉妹がいるつて。

目に入れても痛くない宝物で、その子が頼むなら何だつてしてあげるつてノロケてたつけ。」

「あのバカ・・・」

「アハハ、でもキミは想像していたより、ずっと面白い子みたいだね」

「意外性が売りだから」

「なるほど、楽しみだよ」

そうやって一人で話していると、唐突にドアが開け放たれた。

「ジュン・・・やつと現れたか・・・後で私の部屋に来なさい」
「ハイハイ、じゃあ、外科部長にちやんと診てもらつてね」

厳しい表情で立つ、中年医師のオーラの大きさに気後れしてしまう。コソコソと逃げるようなくぼ室を出て行ったジュン先生とは対照的に、彼は堂々とベッドへと歩み寄った。

若い医師に向けられた険しい表情を崩すように、彼は優しく微笑んだ。

その包容力に捕らえられたオレは、ぼんやりと、ただ彼を見上げていた。

「どうかな」

「少し、頭が痛い。」

「話をしていて疲れたんだろうね、静かにしていなさい」

「タベは、ずっと傍に居てくれたんですか？」

「キミの状態が落ち着くまで、モニターを睨んでいただけだよ」

何度も目が覚めたその時、視界に端に入る白衣の姿。
額の上に置かれたタオルは冷たいまま、何度も裏返して顔の熱を奪つていてくれる。

エライ先生がこんなことまでするんだ・・・不思議と彼が傍に居てくれた事が嬉しかった。

「それで、都築ミナミさん・・・15歳ついでにことは・・・」

「4月から高校生ですか？」

「高校はどちらに？」

「T大附属高校に」

「奇遇だね、ウチの末の息子も同じ高校だよ、キミは何科？」

「特進に・・・」

「優秀なんだね、あそここの特進はイイからね、頑張りなさい。

ウチの息子にも、キミのように上昇志向があるといいんだけど、周りに流される傾向があるんだよ。」

愚痴ともとれる家族の話をしながら、外科部長はモーターを見つめてカルテに書き込む。

オレの様子を観察しながら・・・

「ずっと濡れタオルで冷やしたからね、顔の腫れはスグに落ち着くでしょう。」

これからも、濡れタオルで、氷嚢で冷やすよ！」

「ハイ」

「なにか不便な事はないかな？」

「いまのところは・・・」

「うん、安定しているから心配はないよ、とにかく安静にしていいなさい」

「ハイ・・・先生・・・あの・・・」

「なんだい？」

「あの、時間があつたら、また来てれますか・・・」

「ああ、そのつもりだよ。じゃあ、また後で」

心地よく響く低い声に安心しながら、彼の後姿を目で追つた。
父親とさほど変わらない年齢の男性の暖かな瞳に見つめられると、胸の奥に、これまで感じたことの無い、暖かな気持ちが生まれる事に気が付く。

ずっと何年も感じたことの無かった感覚に戸惑いながら、オレはその気持ちを失いたくなかった。

目の前で、両親が亡くなつて以来・・・容易に他人に開かれる事の無くなつた心は頑なまま。

全てを斜に見て、孤独を肌に感じていた。

都築の家に引き取られても、彼らの気持ちは同情、哀れみ・・・オレには不快な情けでしかなかつた。

そして、幼かつたオレがその中で身に付けたもの・・・それが己を

装うこと、若いあの医師のようにある意味、自分の姿を偽る事だった。

本当の自分はこんななのに、都築の家の中でのオレは、可愛らしさキレイなキレイなお人形さんなんだ。

タカ兄の助けが無かつたら、高校に入つて一人で暮らす事なんて出来なかつたに違いない。

あさま、アノ家の中で人形のような自分を演じているなんて、ほぼ限界。

こうやって自分を取り戻すような真似を、この1年ばかりの間に繰り返してきた。

キッカケをくれたのは、中2の時に出逢つた男。

少しの間付き合つたその男に、色々な事を教えてもらつた。
男と女のこと、社会のこと・・・そして、オレ自身のことまでも。別れてしまつた今でも、たまに思い出し懐かしく恋しくなる那個、オレにとつて初めての男だった。

ああ、あの人に逢いたいな・・・逢つて、抱きしめてもらいたい・・・
・オレを初めて受け入れてくれた人だから。

誰もが羨んだ、サラリと流れた長い髪をバサリと切り落としたのは、1年前。

本当の自分の姿を探して街を歩いて・・・いろんな友だちが出来た。
・・そして、

自分の本性を知つたんだ・・・

愛されても、決して愛する事の無い、愛を信じじとの出来ない自分の性を。

誰だつていいんだ、ただ、オレの傍に居てくれて愛を囁いてくれる

誰かであれば。

満足に愛の言葉も口ひできなくとも、その優しいぬくもりに溺れて
いたいと願つ。

6（後書き）

「こんにちは、洗井あい　です。お付き合いで頂きありがとうございました。

ムーンライトノベルズ「コメのつづき」のラストでハルキとリョウが話していた「ミナミがリョウを好きなワケ」を急に書きたくなつて、番外編として登場させてしました。

「好きなワケ」は未回答のまま、ミナミを助けたシーンを書いてただけに？だつて、15歳のヤンチャなミナミは、リョウを「アホ」扱いですからね・・・これが恋に発展するのかいささか疑問が残ります。

少し見えてきたミナミの家庭の事情や、従兄弟のタカ兄が歯科医とかなんとか。

もちろん、ジュン先生はリョウの正真正銘お兄さんですよ・・・相当な不真面目キャラで作るつもりです。

ミナミをイタぶつて病院送りにしてしまいましたが、それでもへこたれないとおもふから流石ですね。

リョウと出会い前までの、ミナミの遍歴とでもいいまじょうか・・・ハルキとの出会いや関係も気になるし、奇妙な恋愛遍歴も披露してみたいし、番外というか、ミナミの事情を少し書いていこうと思っています。

この続は、ムーンライトノベル「コメのつづき」にて連載予定です。

10月吉日　洗井あい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2499a/>

優しいぬくもり

2010年10月14日07時56分発行